

# 盛山正仁文部科学大臣が語る 教育課題とその打開策

2023年9月、新たに就任した盛山正仁文部科学大臣。就任後の10月、問題行動調査の公表があり、いじめ認知件数や小中学校の不登校児童生徒数が過去最多に。12月には令和5年度（令和4年度実施）公立学校教員採用選考試験の実施状況が公表され、全体の競争率は3.4倍と過去最低となった。喫緊の教育課題が見えてくる中、今後教育行政はどのように進められていくのか。上越教育大学林泰成学長が聞いた。

進行／協同出版株式会社代表取締役会長・主筆 小貫輝雄 まとめ／編集部 写真／岡田圭一



## 文部科学大臣 盛山 正仁

PROFILE ● Moriyama Masahito  
1953年生まれ。東京大学法学部卒。神戸大学大学院法学研究科修了、同大学院経営学研究科修了。博士（法学）、博士（商学）。1977年旧運輸省入省。2005年に第44回衆議院議員総選挙初当選（現在は5期目）。教育における情報通信（ICT）の利活用促進をめざす議員連盟・幹事長も務める。2023年9月に第30代文部科学大臣に就任。座右の銘は一期一会。

### 好奇心を持ち 自分で考えられる子供

**林** 初めに、大臣ご自身の学校教育に対しての思いや教育観についてお話しいただきたいと思うのですが、いかがでしょうか。

**盛山** 思い出に残っているのは、中学1年生の担任の先

生の言葉です。数学がご専門の先生でしたが、「好奇心を持ちなさい」とおっしゃっていました。今でもその通りだなと思います。やはり、周りから強制されたことではなく、昆虫でも天体でも自分自身が関心を持ったことであれば、「不思議だな」「どうしてこうなるんだろう？」と自分で調べます。ですから子供が好奇心を持ち、自分



写真左：上越教育大学 林泰成学長 右：盛山正仁文部科学大臣

自身で考えるように促すことが、学校教育で大事だと思います。

また、小中高などとは違ってきますが、私の大学時代を振り返りますと、十数名のゼミで、先生が温かい親心でもってご指導くださいました。このように校種に限らず、子供一人一人に合わせ、足りない部分を伸ばすような指導ができるかというのではないかと思います。

**林** ありがとうございます。

昨年9月に文部科学大臣としてご就任され、現場の声をたくさん聴かれています。不登校、いじめなど子供の置かれている状況などの教育課題もございますが、どのように考えていらっしゃいますか。

**盛山** 不登校、いじめについては、「問題行動調査（児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査）」の結果において、令和4年度の小中学校における不登校児童生徒数は29万9048人と約30万人。小中学校でのいじめの認知件数は66万3348件で、ともに過去最多の数値となっております。大変深刻で、重大な喫緊の課題と認識しております。

このような状況を踏まえまして、昨年10月17日、「不登校・いじめ緊急対策パッケージ」を策定し、昨年末の令和5年度補正予算で対策推進のための予算として51億円を計上いたしました。不登校に関しては「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策（COCOLOプラン）」を昨年3月に策定し、学びの多様化学校（いわ

ゆる不登校特例校）の設置促進等に関する経費を令和6年度の予算案に89億円を計上しております。子供たちが安心して学ぶことができる、誰一人取り残されない学びの保障に向けて、全力で各地域の先生方をはじめ関係者の皆さんと取り組んでいきたいと考えております。

また、国会でも取り上げられている課題に、教員の働き方改革がございます。先生方の学校での長時間勤務や処遇の問題、また、学校の教員を希望する方が減っているとされている件についても、検討を進めているところです。教師を取り巻く環境整備については、今年の春頃に一定の方向性を示したいと考えております。やはり、教育というのは、これからの日本を支えていく若人を育てる大変重要な仕事です。校種を問わず、多くの先生方に教育現場で頑張ろうと思っただけのような環境を整えていくことが大事だと考えております。

**林** 不登校やいじめの問題の話題に戻させていただくと、数が増えているという課題は重大だと私も考えております。一方で、きちんと表に出てくるのが大事で、認知件数が減ればいいというだけではなく、解決することが大事だと考えております。

**盛山** そうですね。今まで表に出なかったことが把握できたことで、件数が増えたということはきっとあると思います。時代の変化もあるでしょうが、どの学校でも不登校やいじめの問題は当たり前になり得ます。そのような状況は改善していかなければいけないと考えてお



上越教育大学長  
林 泰成

Interviewer

PROFILE ● Hayashi Yasunari  
1959年生まれ。同志社大学文学部文化学科哲学及び倫理学専攻卒業。1991年同志社大学大学院文学研究科博士課程後期課程哲学及び哲学史専攻満期退学。1996年上越教育大学学校教育学部助教授。以降、大学院学校教育研究科教授、附属小学校長、大学院学校教育研究科専攻長、副学長、上廣道徳教育アカデミー統括監督者、大学院学校教育研究科学系長、国際交流推進センター長を経て、2021年4月より現職。

ります。仮に不登校になったとしても、その子供が後に立ち直り、成長していただけるように、教育に関係する我々がしっかりと取り組んでいく必要があると思います。

### 二種免許状の特例のねらいは

**林** 令和7年度から4年制大学で教員の二種免許状が取得できるようになります。そのねらいについて教えてください。

**盛山** 様々な教育課題への学校の対応力を高めるために、多様な専門性を有する質の高い教職員集団を形成していかなければいけないと思っております。同時に学生が大

## 教員養成大学として 教職大学院で 実践的な形で教員の 高度化を図っている

(林 学長)

学4年間に、留学や教員以外の資格取得を目指す場合、なかなか両立が難しく、教職課程の履修を断念することも考えられると言われているところです。そのような指摘を踏まえまして、語学力やグローバル感覚を養うための留学経験や、心理、福祉関係の資格取得など、強みや専門性を身に付けるための活動、専門科目の履修と、教職課程との両立が可能なカリキュラムを4年制大学が実施される場合は、二種免許状の教職課程を特例的に開設できる制度改正を、昨年行ったところであります。令和7年度から、本特例による教職課程の開設が可能であります。

**林** おそらく学校現場としては、教師としての高いレベルを維持できるのかが気になる点であると考えていると思います。また、私どものような教員養成を中心とした教育大学には一種免許状をメインに取得し、プラスアルファとして他校種の免許状、あるいは二種免許状を取得する学生が多くいます。そのこととの関係性が気になるところです。

**盛山** 林先生のような教員養成大学の方が大変気になるポイントかと思います。我々としましても、基本は一種免許状ということを変えるわけではありません。教員不足があり、二種免許状を取得できる仕組みがあることで、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成につなげたいと考えているわけです。

4年制大学で二種免許状を取得する方は、一種免許状より教職課程の取得単位数が少なくなります。留学や別の資格取得など、幅広く様々な経験をされている方で、教育に関心のある方には二種免許状を取得して教育現場に入っただけ、その後、研修や、講習などで必要な科目を履修することによって二種免許状から一種免許状に上げていくなど、質の向上を目指していかれることと

## 教育課題への 対応力を高めるために、 質の高い多様な教職員 集団を形成していく

(盛山 大臣)

思います。既に4年制ではない学校で二種免許状を取得する課程もございますから、4年制大学でも様々なコースを増やして多様な形にしていきたいところです。

**林** 本学を初め、教員養成系の教育大学では、教職大学院という形で、より実践的な形で教員の高度化を図っております。この二種免許状の特例はもちろん、現在教員のなり手不足という問題もあり、専門性を持つ方に教員として現場に入ってもらうためであると十分理解はしておりますが、先に申し上げた教職大学院における教員の高度化とは違い、教員養成が目指す全体の方向性がブレているのではないかと感じております。失礼な言い方になりまして、申し訳ございません。

**盛山** 教員養成大学・学部などで育成される教職員集団の中核を担う教師の高度化と多様な専門性を有する人材を教職員集団に取り込むための制度の弾力化の両方を勧めています。教員になる方の履修方法や大学での教職課程をどのようにしていくのか、教員養成大学の在り方については、今、林先生がおっしゃっていることも踏まえまして、今後とも審議会等の議論を踏まえ、検討させていただきたいと思っております。

**林** ありがとうございます。

### 試験早期化と教育実習実施時期の課題

**林** 現在大きな話題になっている教員採用選考試験の早期化、複線化、共通問題など、これからの選考試験の在り方についておうかがいいたします。教員採用試験の改革ともいえるのでしょうか。どのようにお考えになられているか、改めてご説明いただけますでしょうか。

**盛山** 教育の質向上のためには、できるだけ多くの教員



志願者を確保して、優れた人材を採用することが必要であると考えております。教員採用におきまして意欲ある志願者を確保するため、昨年5月、採用試験の早期化や複数回実施などの改善の方向性を提示させていただきました。特に、試験の早期化に関しては第1次選考の日程について、今年の6月16日を1つの目安として示し、多くの教育委員会に対応していただいているところです。また、第1次選考の共同実施につきましては、各教育委員会における負担の軽減を図り、より効果的、効率的に行うことで、第2次選考においてより丁寧で人物重視の選考に注力できるようにする観点から有用と考えておりますので、各教育委員会のご協力もいただきながら、具体的に検討を進めてまいります。全ての自治体が同じように対応しているかどうかはともかく、教員採用選考の工夫改善をしていきたいという方向性については、多くの関係者の皆さんと共有できています。

現下の採用倍率の低下あるいは受験者数の減少という現状を踏まえながら、教員採用選考の改善を進めていくことが必要と考えております。秋冬の追加選考実施も含め、地域の実情に応じて、積極的な対応が行われるよう、当省としては引き続き取組を促進してまいりたいと思っております。

**林** 学内でも教員間で意見交換をすることがございます



# 人材を確保するために、 教職の魅力 を高めていくことが 不可欠である

(盛山 大臣)

## 教員の働く環境改善を進めていく

**林** 大臣は先ほど、働き方改革にも言及されていました。この働き方改革もうまく連動しながら、教員不足を解消していくと捉えていいものでしょうか。

**盛山** 林先生がおっしゃる通り、試験の早期化、複線化だけでは教員不足は解消できません。処遇の改善や働き方改革とセットで、対応していくということではないかと思えます。

教師にできるだけ優れた人材を確保していくためには、教職の魅力を高めていくことが不可欠であると思えます。そのためにも、働き方改革と処遇改善、学校の指導・運営体制の充実、教師の育成支援——このようなことをトータルに進めていくことが重要だと考えております。我々文部科学省では令和元年の給付法（公立の義務教育諸学校等の教育職員の給与等に関する特別措置法）の改正を踏まえまして、時間外在校等時間の上限を定める指針を策定いたしました。教職員定数の改善、教員業務支援員をはじめとする支援スタッフの充実、あるいは学校における業務の見直しなど、様々な観点から総合的に進めてまいりました。令和4年度の「教員勤務実態調査」の速報値によりますと、教員の在校等時間が減少しております。このことから働き方改革の成果はそれなりに出ていると考えておりますが、一方で長時間在籍している先生方もまだまだ多くいらっしゃるのが現実でございます。あらゆる方策をミックスしながら、働き方改革で職場の環境改善を進めていきたいと考えております。

**林** 働き方改革は当然、本学の附属学校にも求められていることで、現場からの声も聞いております。これまで行ってきた研究授業などが、以前より時間が短縮されて

いるようなことも多々あると聞いています。将来的な教育の在り方を研究する附属学校の在り方を考えると、その部分が弱くなっているとも感じられます。とはいえ、時間を超えて働かせることでその研究が成り立っていたとすれば、改善すべきでもあります。このような手間暇がかかることについては、教育の問題に限らず、悩ましいところではあります。

**盛山** 私自身は現在のポストに就く前に、学校教育のICT化に取り組んでまいりました。ICT化の対応で仕事量が増えたという先生もいらっしゃると思いますが、他方、校務などがICT化され、業務が統一化されることによって合理化され、時間短縮できている部分もあるかと思えます。このようにICTを上手に使うというアイデアがあると思えます。あるいは、クラブ活動のように、アウトソーシングするという策もあるかと思えます。このようなことを含めて、教育現場での時間短縮だけではなく、働き方改善をうまく進めていただければと思います。

## 教員を目指す方へメッセージ

**林** 私自身も高校時代に不登校状態になったことがあります。それが意味では、教育という領域で仕事をするきっかけになっています。もともとは哲学や倫理学を学ぼうと大学院まで進学したのですが、途中から学校教育の在り方について、言いたいことがどんどん湧いてき

て方向転換をしたという一面がございます。ですので、学校教育が子供たちのためにいい形で展開していったらいいと、心から思っております。

最後になりましたが、これから教員を目指す若者に向けて大臣から一言、応援のメッセージをいただけますでしょうか。

**盛山** 教師というのは大変大事な仕事で、「公教育」の要です。児童生徒に密接に関わりながら成長を見守り、あるいは成長を支援していく、他の職業ではなかなかできない経験、感動を得られる職業です。我々文部科学省ではこのような教職の魅力を高めていくためにも、学校における働き方改革や処遇の改善、学校の指導・運営体制の充実、教師の育成支援を一体的に進め、教師の働き方、働く職場の環境改善を図ってまいります。教師を目指される若い方々、志高い皆様におかれましては、教育現場で子供たちの成長に寄り添いながら、ご自身もともに成長されるようになると思います。そうして、ご自身のかけがえのない人生というものを作っていただければと思います。自分が本当にお世話になった、尊敬できる先生に対しては、ずっとその気持ちを持ち続けることになると思います。教職を希望される方から、教職に就いてよかったと言ってもらえるように、我々文部科学省は、地方自治体、教育委員会と協力しながら、働く環境の整備にしっかり取り組んでいきたいと考えております。

(2024年1月16日、文部科学大臣室にて)

## インタビューを終えて

### 誠実さと教育課題解決への意欲（上越教育大学長 林 泰成）

今回、はじめて盛山大臣の訶咳に接し、私の不躰な質問にも丁寧にご回答をいただく中で、とても誠実な方であり、これまでのさまざまなご経験や具体的なデータに基づいて、教育課題の解決に向けた取り組みに力を発揮してくださるものと感じた。天然資源の乏しい日本では、教育こそが未来社会を支える基盤になると考える。大学もまた、文科省、教育委員会、学校現場と連携しながら、個々の子どもを支援し協同の学びを進める教員の養成に取り組んでいきたい。そうした思いを新たにできる機会となった。



が、大学としては、採用試験の実施時期と教育実習との関係性が大変気になる場所です。

つまり、学生は教育実習で学校現場を経験した後に、教員採用選考試験を受験することが望ましいのではないかと考えているわけです。しかし、試験の実施時期が前倒しされると、教育実習の実施時期は再検討すべきではないかという意見もあります。さらには、大学3年生の夏ないし冬に選考を行う自治体がございます。その場合、確実に教育実習より前に受験する形になるわけですが、その教育実習の前段階で学生たちは受験を決断させ、教師になろうという気持ちになれるのかどうか。例えば、学生によっては、教育実習を通して自身の教職への思いを判断する学生もいると思います。

**盛山** 教師に限らず、本来は実習や現場での経験を踏まえたうえで、就職活動に入るということは大切だと思います。各業界の採用活動が多様化する中での策として教員採用選考の早期化、複線化を提示しております。教育実習の在り方については、理論と実践の往還を重視する観点から、実施時期や方法も含めた見直しを大学にお願いしています。懸念点がどうなっていくかということも含めて、しばらく時間をいただいてご判断をいただければと思います。